

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	稲田 八穂
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目 「情動の共有」による教師の力量と同僚性の形成			
論文審査担当者 主 査 教授 難波 博孝 審査委員 教授 朝倉 淳 審査委員 教授 山元 隆春			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、初等教師教育において「教師の力量形成」を重要な課題と捉え、それを妨げるものとして「教員の多忙化と同僚性の希薄化」とした。この状況を田村修一（2013）は教師の「被援助志向性」の低さだと捉えている。これをふまえ、援助要請が行える教師の資質に「情動の共有」ができる関係性があることを提起していく。</p> <p>本論文の目的と方法は以下のとおりである。</p> <p>（1）教師の力量形成における「情動の共有」と同僚性との関連（第一章，第二章） 教師の専門的力量について、鹿毛雅治等（2006）の論考から、「教える専門家から学びの専門家」へ変革していく必要性を考える。次に、筆者の力量形成過程を、ライフヒストリーや他者からのナラティブによって検討し、その上で「情動」のメカニズムを明らかにする。情動がどのような働きをするのかを脳科学や心理学の分野の論考を基に検討を行う。また教師への調査から、教師の力量形成に「情動の共有」がいかに関与しているかを述べる。</p> <p>（2）実践記録から見える子どもとの「情動の共有」（第三章） 子どもとの「情動の共有」について具体的な実践を振り返る。「行為の中の省察」に近づくよう、その実践を「情動の共有」という視点で語り直していく。学級において教師は子どもにとっての「環境」であり、子どもとの「情動の共有」により、子ども同士、学級集団の「情動の共有」が成り立つことを明らかにする。</p> <p>（3）研究者が実践者とどのように「情動の共有」を結ぶか。（第四章） 力量形成について教師の意識調査を実施し、研究者として初等教育現場とどう向き合って教師の力量形成を目指していくのかを提案する。</p> <p>本研究の概要は以下のとおりである。</p> <p>（第一章）本研究では教師の専門的力量を次のように捉える。</p> <p>① 職場における優れた先達モデルの伝承と模倣により、実践経験を積み重ねて確かなものにしていく力</p> <p>② 事例研究による実践の省察と判断を行い、個別の「実践的知識」を総合的な「実践的見解」へ高めていく力</p> <p>③情動的次元を重視し、周囲の人間と「情動の共有」による関わりができる力</p>			

これらをふまえ、筆者自身の自己のライフヒストリー、および筆者の実践についての3名の研究によるライフヒストリーの省察を考察した。その結果、自身が常に「カリキュラムづくり」に取り組んでいたこと、それは同僚性と子どもの見つけ方で変容していったことが明確になり、この二つは教師の力量形成に大きく関わるということが明らかとなった。

(第二章) 情動については、心理学、脳科学、医学、認知科学等の学問的な立場で論争があるが、それらの先行研究から本研究では情動を「心の一番深いところから発する人間を動かす根源的な力であり、原始情動(快・不快)と基本情動(喜び、受容、愛情、怒り、恐れ、嫌悪)とがある」と定義した。

「情動の共有」については、須田治(2009)、ワロン(1987)、及びハーグリーブス(2015)をふまえ、「情動の共有」を「自他の情動を理解することでお互いをより良い方向へ導いていこうとする力が生まれ、情動が他者へ伝播し、相補的な情動、集合的活動を生み出すこと。」と定義し、この定義を基に、「情動の共有」が教師の力量形成にどのように関わるのかを、事例研究で明らかにした。これらの事例研究から、日常の教職生活に内在しているインフォーマルな営みにより、「情動の共有」が生まれることが明らかになった。

(第三章) 子どもとの「情動の共有」を明らかにするために、次の過去の実践を「情動の共有」という視点で語り直した。①知的障害で場面緘黙の症状をもつひろしが教師との「情動の共有」により心を拓いた実践 ②生活日記を通して表面には現れない正の苦しさを教師が共有した実践 ③書くことによって自分自身と周囲へ「情動の共有」をしていった実践 ④「排泄」に問題を抱えるたくやが読み聞かせで他の児童と「情動の共有」をしていった実践⑤ドラマ・ワークショップによる「情動の共有」でたくやが学級で受け入れられていった実践⑥自分の過去と向き合うことで学級の友達と「情動の共有」ができるようになった実践

これらのケース・メソッドを通して、教師はどのようにして子どもとの「情動の共有」に向かっていけばいいかを論じた。

(第四章) 筆者が参与観察をしている6つの学校で質問紙調査を行った。その結果、年代によって力量形成の捉え方に差があることが明確になった。また、研究者によるサポートのケース分析を行った。ここからは、「関係形成」をしながら〈介入〉していく以下の手立てが明らかとなった。これらをふまえて、現場へのフィードバックの方法について提案した。

本研究の意義は、「他の教師との関係性」「学習者との関係性」「研究者と教師との関係性」それら全てに「情動の共有」が大きな役割を果たしていることを、自身と他者による「ライフヒストリー」、実践記録の分析、研修会のプロトコル分析、質問紙調査などの多様な方法で明らかにしたことである。今後は、この「情動の共有」を教員養成・教員研究で育てていくかその具体的な方法を追究する必要がある。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(教育学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。